



事前研修 (6/15) 第3回事前研修

神戸市立人とみらい防災センター・神戸市内フィールドワーク

神戸市立人とみらい防災センターを訪問し、見学・体験および、市内のフィールドワークを行いました。人とみらい防災センターは、1999年に発生した阪神・淡路大震災に関する資料が展示されており、当時の資料だけでなく復興に関する資料、そして防災に関する展示・体験などができる施設になっています。神戸市内フィールドワークでは、慰霊施設を訪問しました。そのあと、倒壊した阪神高速の橋脚の遺構を見学し、メリケンパークに保存されている震災の爪痕を見学しました。神戸市内の当時の遺構はほとんど残っていませんが、被災当時の資料を見た後に現在の状況を見ることで、復興に関しても体感できたのではないのでしょうか。



防災センターにて



震災の遺構(時計)



メリケンパークにて

生徒たちの振り返り・感想

2年中西

神戸では阪神・淡路大震災の経験を元に、共助・公助について深く学ぶことが出来た。初めに見た映像は、私にとって阿倍野防災センターの震度7の体験よりも衝撃的なものを感じた。実際に起こったことだと理解して見ていたはずだが、目の前に上映されている映像が信じがたく、残酷なものだと感じた。現代とは違い木造建築物が多い当時の建物や公共交通機関が崩れる様子は、見ていてとても心が痛んだ。直下型の地震ということで、東日本大震災や南海トラフと違い津波はなかったが、それ以上に火災が大変だったと親にも聞いた。まだ私達も生まれていない震災で、現在ではニュースに大きく取り上げられることも減ってしまった阪神・淡路大震災だが、「あれは悲惨やったなあ。」という父の言葉を聞いて、当時の人々がいかに大変な思いをしたかを想像することが出来た。展示コーナーで寄付された品々の中には、海外から寄せられたものも多くあり、能登半島地震の際と同様、多くの地域や国から援助を得ていたことが見て取れた。最近起きたトルコや台湾での大地震、助けていただいた日本国民として、自国だけでなく海外の人々の支援もできるようになりたいと感じた。復興の大変さは言うまでもないが、このような場面での共助というものがいかに大切かを学ぶことが出来、人との繋がりが薄れている現代社会においてでも、地域の人々の共助は国からの援助に劣らず必要なものだと感じた。このような学びを得た後、展望台で神戸を一望すると、当時の人々の努力が伺い知れ、胸に込み上げるものがあった。今や日本有数の観光地となっている神戸だが、街に残っている被災の跡をこれからも受け継いで、当時の状況や将来への教訓を忘れないようにしたいと考える。

2年内藤

神戸にある防災センターに行って阪神淡路大震災が起きた頃の当時の街の様子を見たり、復興までの道のりなどを知った。阪神淡路大震災はけっこう前の出来事で正直なところ、私は火災が多かったなどの乏しい情報しか知らなかった。今回防災センターに行って震災で形が変形した物を見たり、写真を見たりすることを通してこの震災の脅威を痛感した。たった1回の地震が一瞬にしてたくさんの人の命を奪い、町を180度変えてしまうんだと思うと本当におそろしいものと思った。しかし、阪神淡路大震災から29年経った今、その記憶は風化されつつある。だから地震の記憶や被災した人の思いを継承し、これから起こる自然災害でできるだけ被害を少なくすることが大切だと感じた。